

女子中等教員の地理的移動に関する社会学的分析

寺崎里水（お茶の水女子大学大学院）

1. 問題の所在

戦前のわが国の女子教育についてのこれまでの研究は、男子の教育制度と比較する形で女子の教育制度の成立過程をみるものと、良妻賢母思想研究・性別役割規範研究といった女子教育の内容を問うものとの2つに大きく分類できる。前者は女子の学歴が、社会的地位を表示する地位表示機能¹⁾を果たしていたこと、故に男子のそれよりも教育段階や教育内容において低く位置づけられていたことを明らかにし、後者は良妻賢母思想が時代によってその内容を変化させていること、理念と実態との乖離がみられたことなどを明らかにしてきた。

なかでも天野²⁾ (1987) は、戦前期の学歴エリートの配偶者の学歴に注目して、女子教育機関の地位表示機能に基づいた階層構造の存在を示唆した点で、その後の研究に大きな影響をもった。天野²⁾の指摘によると、名門校の出身という学歴は、学歴の所有者が学歴エリートの妻にふさわしい学力と教養の持ち主であり、また裕福で開明的な文化をもつ家庭の出身であるという経済・文化的背景を表示する地位表示機能を果たしていた。学歴エリートの配偶者としてふさわしい学歴とは、「職業教育」よりも「教養教育」を行っていた学校のものであり、また官公立学校よりも私立学校、中等教育機関よりも高等教育機関であることが、カリキュラムや設立理念の分析から明らかにされたのである。

職業達成に結びつかない女子の学歴に関する研究は、婚姻関係から観察できる学歴の地位表示機能に注目することによってようやく議論の俎上にのるようになった。では、学歴をもつ女性のなかで、学歴エリートの配偶者とはどういう存在だったのだろうか。単なる学歴エリートとしての女子に関する議論、そして結果的に職業教育と教養教育を隔てるラインについての検討は未だ行われていないのである。

本報告では、先行研究においては職業教育を目的とする教育機関であり、地位表示機能がやや弱いと位置づけられている東京女子高

等師範学校（現国立お茶の水女子大学。以下東京女高師と略す。）の卒業生に焦点をあて、いくつかの観点にしぼって検討していくことにする。

第一に、職業婦人（女子中等教員）としての彼女たちの職業キャリアがどのようなものだったのか、という観点である。中等教員に関する教育社会学的研究には、山田の一連の研究がある。戦前の中等教育機関は師範学校、中学校、高等女学校など、多様な機関から構成されており、教員の学歴や資格もさまざまであった。こうした中等教員の階層性は、彼らの職業集団、精神形成、戦前の中等教員観に大きな影響を与えたと思われる。山田（1992）はこのような課題意識のもと、帝国大学、高等師範学校の卒業生に注目し、給与や勤務学校、昇進などを分析することによって、戦前における中等教員社会の階層性を明らかにした。師範学校、中学校、高等女学校という3つの中等教育機関において、帝国大学卒業生、高等師範学校卒業生が教員全体に占める割合は少ないながらも、校長占有率においては非常に高い割合を占めていた。とりわけ帝国大学卒業生は高等師範学校卒業生よりも待遇、地位の面で上位にいたのである。

また、山田は他の論考において帝国大学卒業生の中等教員の職業キャリアを考察しており、高等師範学校の卒業生が中等教員どまりであったのに対し、帝国大学卒業生は中等教員から高等教員へ転職する者が多かったことを明らかにした（山田 1993）。

こういった観点での女子中等教員の研究は、女高師全体の卒業生数が少ないこともあり、行われていない。ここでの分析を通じて、女子中等教員としての東京女高師卒業生の位置を明らかにするとともに、職業教育を施す教育機関を経た女子の学歴エリートとしての位置づけを試みたい。

第二の観点として、東京女高師卒を媒介とする女子学歴エリートの移動の問題があげられる。東京女子高師の利用層がどの地域、どの学校種別に偏っているのか、結果として卒

業生が戻っていく地域・学校はどこかという関心である。

学歴を媒介とするエリートの移動という関心では、高等学校や帝国大学への入学者の地域別輩出率に関する研究が行われている（たとえば三谷 1997 など）。また、地域の人材と学歴をめぐる移動に関しては広田・鈴木・高瀬（1999）が興味深い知見を提出している。中等教員を対象とする前述の山田の研究では、高等師範学校入学者の入学前学歴は師範学校であると述べていたが、東京女高師卒業生という女子の学歴エリートはどのような入学前学歴をもつのだろうか。ここでの分析を通じて、女子の最高学府としての東京女高師の位置づけを試みるとともに、師範学校と高等女学校という2つの女子の中等教育機関の関係を考察したい。

東京女高師は戦前期、奈良女高師、広島女高師²⁾とあわせてわずか3校しか存在しなかった官立の女子高等教育機関だった。官立の職業教育を目的とする高等教育機関という点で特殊であり、この報告で得られる知見は戦前期の女子高等教育機関、もしくは女子学歴の一般的傾向として述べることは難しい。しかし、これまであまり顧みられることのなかった学歴をもつ女子の社会的地位、もしくは女子の学歴と職業との関係を考察する端緒として、その意義を見出すことができるのではないだろうか。

2. 東京女高師のプロフィールとデータの概要

分析対象とする東京女高師は 1975（明治 8）年、女子師範学校として東京に創設された。東京師範学校への合併（1885 年）を経て、1890 年に女子高等師範学校として独立し、1908 年の奈良女高師の創設をもって東京女高師と改称した。女高師は「師範学校女子部及高等女学校ノ教員タルヘキ者ヲ養成シ兼テ普通教育及幼児保育ノ方法ヲ研究スル」ことを目的としており、修業年限 4 年の文科・理科・技芸科（1914 年以降家事科）の 3 学科の他、研究科、専修科、撰科生等をおいていた。

本報告では『女子高等師範学校一覧』『東京女子高等師範学校一覧』『東京女子高等師範学校・第六臨時教員養成所一覧』の各年度版より、卒業生名簿と在学名簿をデータとして用いる。卒業生名簿に記載されているのは氏名、旧姓（婚姻状況）、本籍、勤務先、

学資支給の有無であり、在学名簿に記載されているのは氏名、出身校（明治期は族籍）、本籍、学資支給の有無である。記載内容には年度によって粗密があり、昭和期には卒業生名簿は名前と本籍のみの記載となる。

3. 分析（当日配布）

4. 考察（当日配布）

（発表は当日配布資料にそって行います。）

- 1) 学歴の地位表示機能に関しては天野¹（1983）参照。
- 2) 広島女高師に関しては三好（1991）、仲監（1981）などに詳しい。1945 年 8 月 6 日に始業日を迎えたこの第 3 の女高師は、戦後、広島高師とともに新制広島大学に包括された。

【主たる文献】

- 天野郁夫 1983 「教育の地位表示機能について」『教育社会学研究』第 38 集 44-49 頁
- 天野正子 1987 「婚姻における女性の学歴と社会階層」『教育社会学研究』第 42 集 70-91 頁
- 広田照幸・鈴木智道・高瀬雅弘 1999 「旧制中学校卒業生の進路分化過程とその規定要因に関する研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 39 巻
- 石戸谷哲夫・門脇厚司編 1981 『日本教員社会史研究』亜紀書房
- 木戸若雄 1968 『明治図書新書 17 婦人教師の百年』明治図書出版
- 三谷博 1997 「帝国大学生の国内移動」近代日本研究会編『地域史の可能性—地域・日本・世界—』山川出版社
- 三好信浩 1991 『日本師範教育史の構造—地域実態史からの解析—』東洋館出版社
- 仲新監修 1981 『学校の歴史第 5 巻 教員養成の歴史』第一法規出版
- 東京女子高等師範学校 1934 『東京女子高等師範学校六十年史』
- 山田浩之 1992 「戦前における中等教員社会の階層性」『教育社会学研究』第 50 集 308-324 頁
- 山田浩之 1993 「旧制中等学校教員のルート」『松山大学論集』463-481 頁